



麗澤大学 森の中の新校舎

株式会社景観設計・東京 都田 徹・渡辺 浩・武田史郎・福井裕人

□大学の理念「仁草木に及ぶ」：麗澤大学における森との共生

最近環境・自然ブームはもち論のこと都会の中での“自然と人間がサステイナブルな関係を結ぶ”ということが極上のランドスケープデザインであるといっても過言ではない時代になりました。

その意味において、この計画では既存の貴重な緑を、もう一度、あってあたりまえの緑にまで、質・量共に戻せないか、そして麗澤の学生が学園の緑をあってあたりまえの森と考えるようになり、それでもなお、その森を慈しんでくれる。そのように、本来の大学のモ

ットーの「仁草木に及ぶ」の捉え方に戻れる環境づくりを理念としました。

□キャンパス全体の緑の分析

—スケルトン+インフィルの緑の提案—

麗澤大学は創立75周年を迎え、生態的には75年経った森をもっています。このキャンパスを“さとやま”と見立て緑地ゾーニングを行いました。

また、これによって75年を経た「森を形成する濃い緑」と「キャンパスの骨格となる緑」を“キャンパスのスケルトンの緑”と定義し、一方、グラウンドやゴルフ場など、今後の開発計画の中で「変化してもよい



やすらぎの広場の“オーナメンタルグラスの庭”

作品概要

作品名：麗澤大学 森の中の新校舎
 所在地：千葉県柏市光ヶ丘2丁目
 発注：学校法人廣池学園
 設計：株式会社景観設計・東京
 設計協力：株式会社岡田新一建築事務所（柳瀬寛夫/多田邦浩）
 監理：株式会社景観設計・東京
 施工：清水建設株式会社（日下修）
 設計期間：2008年3月～2010年12月
 施工期間：2009年4月～2010年12月
 規模：約0.8ha
 主要施設：「つどいの広場」（芝生広場）、「やすらぎの広場」（オーナメンタル中庭）、「くつろぎの広場」（芝生広場）、園路（レンガブロック舗装）、車まわし（レンガ小端）、駐車場、1Fビロティ（レンガブロック舗装）
 植栽（高木）：カキノキ、カツラ、ホオノキ、アカメガンショ、シダレウメ（移植）、ハクモクレン、アメリカザイフリボク、ハナミズキ、ヤマボウシ、シナノキ、サルスベリ、ハウチワカエデ、etc.（90%以上が株立ちの樹木）
 植栽（低木・地被）：オタフクナンテン、セイヨウシャクナゲ、アガパンサス、ヘメロカリス、オオバキボウシ、ツワブキ、シロタエギク、キンウラハグサ、パンパスグラス、etc.（オーナメンタルグラスの庭の方向づけ）

作品評

この作品は、大学キャンパス内全体のみどりを、スケルトン&インフィル手法をもって評価し、整備箇所のみどりについて詳細に確認して、建築計画を含め快適で美しいランドスケープを実現させた秀作である。また、全体的にクオリティの高いデザインが認められ優秀賞に選ばれた。
 当大学キャンパス内の新校舎新築に当って、新校舎周辺の樹林環境と建築を調和させながら、学生等利用者が快適に利用できるアメニティを持ったランドスケープの設計を目的とした結果、みどりの空間と建築空間がみごとに調和し、優れたデザインディテールと相まって実に快適な修学環境を形成している。既存植生に対して詳細な調査と、根回しなどの周到な用意は当然評価に値する事項であるが、全般的にコンセプトとデザインを繋げる説明が欲しかった。みどりをスケルトン&インフィル手法にて捉えた着眼点は確かなセンスと思うが、これについての詳細な解説と表現が欲しかったところである。

緑」を「インフィルの緑」と定義しました。

□デザインコンセプト：キャンパスの中の学舎（まなびや）

- (1)緑の中に囲まれた、スケルトンの緑の中の新校舎とは「森と呼吸する学舎」です。
- (2)たとえば、軽井沢の森の中で学んでいる学生たちというイメージで考えてください。

(3)森と呼吸するとは、

- I. 森をのこす
- II. 森をつくる■▶そして「森とともに生きる」
- III. 森をまもる

以上を私たちは大切にしてキャンパスの一角に「新しい森の中の新学舎」をデザインしました。



やすらぎの広場の夜景



車寄せ部の保存されたシダレウメ(移植樹)



外部ウッド階段とシモクレンの花（左側に保存されたムクノキ）



1階ロビーからの中庭（オーナメンタルグラスの庭）



クローバーの葉をモチーフとしたウッド階段



外部の森との関係を大切にした2Fのロビー空間



本部棟（1号棟）と連絡ブリッジ—森の木々の間を渡る—



既存の樹木まわりを取り囲むホワイトペーパー（スイセン）



“あすなろ館”の中庭（オーナメンタルグラス）



既存の森とやすらぎの広場の連続感



2階テラスと既存の森（学生たちは森の中で呼吸します）